

AI やデータサイエンスを「使いこなす」人へ

～AI 活用人材育成プログラムの創設と発展～

関西学院大学 巳波 弘佳

Hiroyoshi Miwa
Kwansei Gakuin University

1 はじめに

急速に進展する AI（人工知能）の発展により、社会の仕組みや働き方は大きく変容し、現在はまさに時代の転換点にあります。これからの社会で求められるのは、AI やデータサイエンス、およびそれらに関連する技術を理解し、実際に活用できる人材です。そのような人材を育てることは、高等教育機関にとって重要な使命といえるでしょう。

こうした変化に対応する人材育成といえば、AI やデータサイエンス、そしてその基盤となる数学や情報科学を教えることが重視されがちですが、それだけでは見落としになってしまう重要な点があります。それは、専門分野の枠を超えた広い視野を持ち、実践できる人材へのニーズの高まりです。現在では、いわゆる文系学部出身者がシステム開発に携わったり、理系学部出身者が経営企画に関与したりすることも珍しくありません。一つの専門知識に特化した人材よりも、複数の分野の知識を統合し、実際の課題解決に活かせる人材が、これまで以上に高く評価されています。近年注目されている DX（デジタルトランスフォーメーション）も、単なる IT システムの導入ではなく、業務や組織、さらには提供価値そのものの変革である点が強調されています。このことから、単に指示通りにシステムを構築する IT エンジニアではなく、広い視野で知識を活用し、企画立案から実行まで担える人材が求められていることがわかります。

もちろん、社会や産業界のニーズに応える人材育成だけが教育の目的ではありません。しかし今後の大学には、より多様な学生を受け入れ、多様な教育プログラムを整備し、一人ひとりを丁寧に育成したうえで、多様性に富んだ人材を社会へ送り出すことが一層期待されるでしょう。

このような背景のもと、すでにさまざまな取り組みが進められています。実際、文科省は、数理・データサイエンス・AI 教育の推進のために、「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム認定制度」を設けましたが、認定された教育プログラムにより、2026 年 4 月時点で、リテラシーレベルでは年間 59 万人、応用基礎レベルでは年間 26 万人を育成できる体制が整い、「AI 戦略 2019」で掲げられた目標を達成しました。

本稿では、一事例として、関西学院大学における AI 活用人材育成プログラムを取り上げます。これは、文系・理系といった従来の枠組みにとらわれず、AI およびデータサイエンスを分野横断的に活用できる人材の育成を目的として開発されたユニークな教育プログラムです。本稿では、本プログラムの設計思想および具体的な教育内容を概観するとともに、その特徴について整理し、今後の人材育成に向けた示唆を提示します。

2 AI活用人材育成プログラム

2.1 AI活用人材育成プログラムの創設と発展

関西学院大学におけるAI活用人材育成プログラム[1, 2]は、2017年9月に開始された関西学院大学と日本IBMとの共同プロジェクトにより開発されたものです。図1にAI活用人材育成プログラムの創設と発展の流れを挙げます。

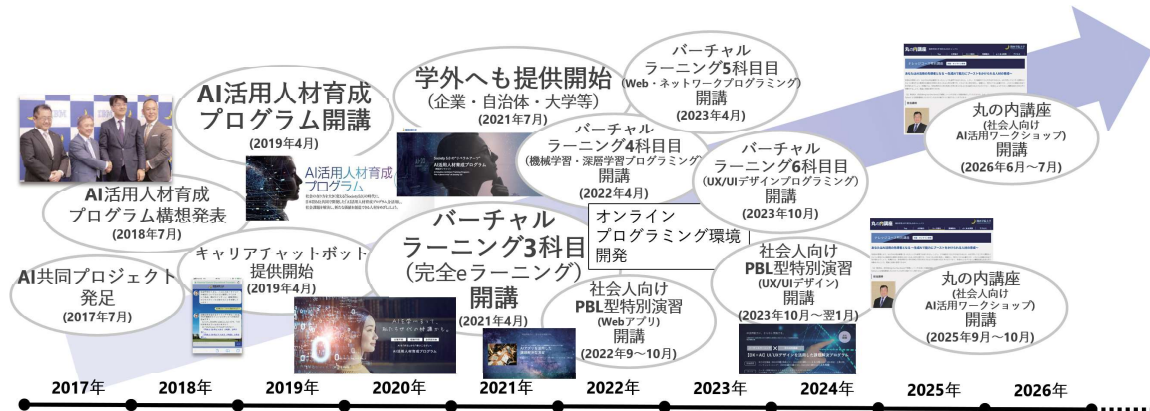


図1: AI活用人材育成プログラムの創設と発展

2019年度にまずは対面講義スタイルの科目として開講し、2021年4月からは、基盤的な科目であるAI活用入門、AI活用アプリケーションデザイン入門、AI活用データサイエンス入門の3科目を完全eラーニング科目として開講し、その後順次、AI活用機械学習プログラミング演習、AI活用Webアプリケーションプログラミング演習、AI活用UX/UIデザインプログラミング演習も完全eラーニング科目として開講しました。

2021年度から完全eラーニング科目群を学外の企業・自治体・他大学などにも提供しています。これからの激動の社会を切り拓くためには、次世代を担う若者だけでなく、現役社会人のリスクリングも欠かせないと考えているからです。また、社会人向けに対面によるワークショップも実施しています。例えば、関西学院大学丸の内講座ナレッジコース特別講座では、生成AI時代における人材育成をテーマとした講義およびディスカッションに加え、生成AIを活用したアプリケーション開発を通じて業務改善について学ぶ実践的な演習を提供しています。

また、本プログラムでは毎年、教材の大幅な更新（メジャーアップデート）を実施しています。生成AIの登場・普及に象徴されるように、本分野は技術進化のスピードが非常に速いため、最新技術やビジネスでの活用事例を継続的に取り入れながら教材内容を刷新し、受講生が常に最新の知識・スキルを学べる教育プログラムを提供しています。さらに、AIやデータサイエンスの最新技術を活用し、完全eラーニング科目向けの学習ログ解析システムを独自に開発しています。このシステムにより、受講生の学習状況や要望、アンケート結果などを収集・分析することが可能です。分析結果は翌年度の教材改訂やプログラム改善に反映され、継続的な教育品質の向上につなげています。

このように、AI活用人材育成プログラムは創設以来、変化に対応できる体制を整備し、不断の改善を重ねながら発展してきました。

2.2 AI 活用人材

現在では、AI 技術は特定の企業だけのものではなく、多くの企業で広く活用される段階に入っています。このような社会において求められるのは、AI や関連技術を理解し、それらをビジネスをはじめとするさまざまな分野で実際に使いこなせる人材です。一般的に「AI 人材」と聞くと、理系出身で高度な数学やプログラミングの知識を備えた情報系の専門家が思い浮かびますが、現実には、最先端の AI を開発する研究者以上に、各種業務の効率化や価値向上のために AI を実務で活用できる人材が不足しています。企業の経営層が強い危機感を抱いているのも、まさにこうした人材の育成に関する点です。

多くのビジネスパーソンが、コンピュータの仕組みを詳しく理解していなくても、あるいは理系や情報系を専門としていなくても、PC やスマートフォン、さらには多様なソフトウェアやアプリを日常業務で使いこなしているのと同様に、AI を活用して課題を解決したり、新しい商品やサービスを生み出したりすることも、既に十分に可能になっています。ただし、技術の知識があるだけで新たなビジネスが生まれるわけではなく、反対に技術を理解しないままでも新しい価値は創出できません。文系・理系という枠にとらわれず、分野横断的な視点で考え、実際に価値を創り出していける人材こそが、これからの社会を牽引していく存在であると言えるでしょう。

AI に関わる人材は、大きく三つに分けることができます（図 2）。最先端の AI 技術そのものを研究開発する AI 研究開発者、AI 技術を活用して現場の課題を解決したり新サービス・新製品を作り出したりする AI ユーザ、そのような AI ユーザにソリューションを提供する AI スペシャリストです。



図 2: AI 活用人材

関西学院大学が実施する AI 活用人材育成プログラムでは、主に AI ユーザおよび AI スペシャリストの育成に焦点を当てました。これらの層は、従来の AI 人材育成において十分に重視されてこなかった一方で、多くの企業が分野を問わず AI ソリューションを求めている現状を踏まえると、人材ニーズの中心に位置づけられます。このような背景から、本プログラムでは、「文系・理系を問わず AI やデータサイエンスに関する知識を備え、それらを活用して現実のビジネスや社会の課題を発見・解決し、新たな価値を創出できる人材」を「AI 活用人材」と定義し、その育成と社会への輩出を目的としています。

2.3 プログラムの特長

関西学院大学の AI 活用人材育成プログラムは、すべての学部の学生が履修できるよう設計されています。これは、多様な分野において AI を活用するための知識やスキルを、幅広い学生に身につけてほしいという狙いによるものです。「文系」の学生は、それぞれの専門分野に AI を組み合わせる力を養うことで、新たな領域を切り拓くことが期待されています。一方、「理系」の学生にとっては、高度な数学やプログラミングの知識が現実社会でどのように応用できるのかを学ぶ本プログラムを通して、実社会に根差した技術開発力を養う機会となるでしょう。

本プログラムの特徴の一つは、「初学者を念頭に置いた授業内容」にあります。Society 5.0 や第 4 次産業革命といった背景的なトピックから始まり、豊富な事例紹介とそれに関連する技術の解説を通じて、AI 活用の感覚を養います。その上で、AI アプリケーション開発やデータ分析の基礎知識・技能を学び、さらに実践力を高めるための演習科目を体系的に配置しています。これにより、事前知識がない学生でも段階的に理解を深められる構成となっています。

また、「体系的かつ実践的なスキルの習得」も大きな特長です。全科目が新たに設計されたもので、既存科目の流用は行っていません。そのため、科目同士が有機的に結びついた一貫したカリキュラムが構築されています。プログラム全体を通して AI およびデータサイエンスの基礎から応用までを学び、その後は実際の課題解決に取り組む PBL（Project Based Learning）形式の発展演習へと進む、自己完結型の学習体系となっています。

さらに、「ビジネス視点の醸成」も重要なポイントです。本プログラムは日本 IBM との共同プロジェクトとして開発されており、IBM をはじめとする多くの企業の実務的な視点が反映されています。その結果、実際のビジネス現場で即戦力となる力を養うことを意識した授業内容となっています。

スキル証明のためのデジタル修了証であるオープンバッジを導入していることも特色です。多くの海外大学やグローバル企業で利用されるなど、国際的にも普及しているオープンバッジを修了者に授与しています。これにより、修了者はオープンバッジを SNS などで表示することで、自身のスキルを社会的にも広く示すことができるようにしています。

AI 活用人材育成プログラムでは、完全 e ラーニング科目をバーチャルラーニング科目と呼んでいます。これは、通常の e ラーニングのように単に動画を視聴するだけでなく、演習課題やオンラインテスト、オンラインプログラミング環境、AI チャットボットによる質問対応なども包含したトータルな学習体験を提供するものだからです。知識習得と基本的な演習は、さまざまな先端的コンテンツを組み合わせた高度な e ラーニングであるバーチャルラーニングで実施することにより、多くの学生に場所や時間を問わない学習機会を提供しています。一方、高度な演習や PBL は教員による直接指導のもとで実施し、受講者一人ひとりに応じたきめ細かな指導を行っています。このように、オンライン学習と対面学習それぞれの強みを効果的に組み合わせた教育プログラムとなっています。

この AI 活用人材育成プログラムは、各学生の専門分野と独立したものではなく、それを補完し強化する役割を担っています。学部での専門的な学びが基盤であり、その価値を高める手段として AI 活用スキルを位置づけています。そのため、まずは自らの専攻分野をしっかりと深め、その上で AI を活用すれば何が可能になるのかを考える姿勢が重要です。「AI そのものを学ぶことが目的」ではなく、「AI を手段として何かを成し遂げる」とい

う意識を持つことを求めています。

2.4 バーチャルラーニング

AI 活用人材育成プログラムにおけるバーチャルラーニングについて詳しく説明します。

本プログラムでは、AI アプリケーション開発やプログラミングに関する解説動画を取り入れた演習を豊富に用意しています。これらの演習では、受講者が動画を何度も見返したり、必要に応じて途中で止めたりしながら進められるため、自分の理解度に合わせて無理なく学習を進めることができます。その結果、各自が主体的に学習に取り組みながら、着実に演習を進められる環境が整えられています。単なる視聴型の学習にとどまらず、実際に手を動かして体験的に学ぶことで、知識とスキルの両方を身につけられる点が、バーチャルラーニングの大きな特徴です。

さらに、本プログラムではブラウザ上で完結する独自のオンラインプログラミング環境を整備しています。初心者が最初につまずきやすい環境構築の問題を解消し、学習初期段階での離脱を防ぐことを目的としています。これにより、学習者は初めからプログラミング言語の基礎やアルゴリズム設計に集中することが可能になります。もちろん、自分で環境構築を行いたい学習者のための補助資料も準備されています。従来は、環境づくりを含めた試行錯誤の過程自体が学習の一部とされてきましたが、このような方法は多くの初心者にとって負担が大きく、結果として挫折や苦手意識につながる場合もありました。現在ではノーコードやローコードの普及により技術的な障壁が下がっており、むしろ論理設計やアルゴリズム構築の力が重視されています。こうした背景から、従来のやり方だけでは学習者の裾野を広げることは難しいといえます。このオンライン環境はその課題に対応する新たな選択肢です。従来のブラウザ型ツールは簡易な開発にとどまっていたましたが、本環境では機械学習や深層学習、さらにはデータベース連携を含む Web アプリ開発まで扱えるよう設計されています。そのため、初心者でも Python や Java の習得にとどまらず、より高度な応用プログラムの理解にまで到達することが可能になります。

成績評価方法については、単位認定にふさわしい水準を確保するためのオンラインテストを開発しました。各講義の内容を細かい単位に区切ってテストを実施し、合格しなければ次に進めない仕組みにすることで、段階的に理解を積み上げられるようにしています。出題形式は選択式だけでなく、実際に作成したプログラムの実行結果を答えるものなども含まれており、知識の理解度に加えて実践的なスキルも測定できます。また、プログラミングテストでは実際にコードを書く必要があるため、実務に近い形で技能を評価することができます。

不正防止についても複数の対策を講じています。二段階認証に加え、AI を用いた顔認証も組み合わせることで、本人確認の信頼性を高めています。この確認はログイン時だけでなく試験中にも行われるため、なりすまし行為を抑止できます。さらに、問題のランダム出題や制限時間の設定によって、受講者間での不正な情報共有も防いでいます。また、キーボードやマウスの動きから不正行為を検出する機能も導入しています。これらの仕組みにより、公平で信頼性の高い成績評価を実現しています。

学習支援の一環として、AI による TA チャットボットを導入しています。これは既に 2021 年から運用されており、多くの受講者からの基本的な質問に即時対応することが可

能です。スマートフォンなどからいつでもアクセスできるため、疑問を抱えたまま待たされることなく学習を継続できます。これにより、集中力を維持しながら効率的に学べる環境が整っています。一方で、チャットボットでは対応が難しい高度な質問については教員やスタッフが対応します。このようにAIと人間のサポートを組み合わせることで、迅速性と質を両立した学習支援体制が実現されています。

2.5 各科目の内容

各科目の内容について説明します。まず、図3に、AI活用人材育成プログラムの科目構成を挙げます。下段の科目の履修を先修条件として、順次受講していくことになっています。

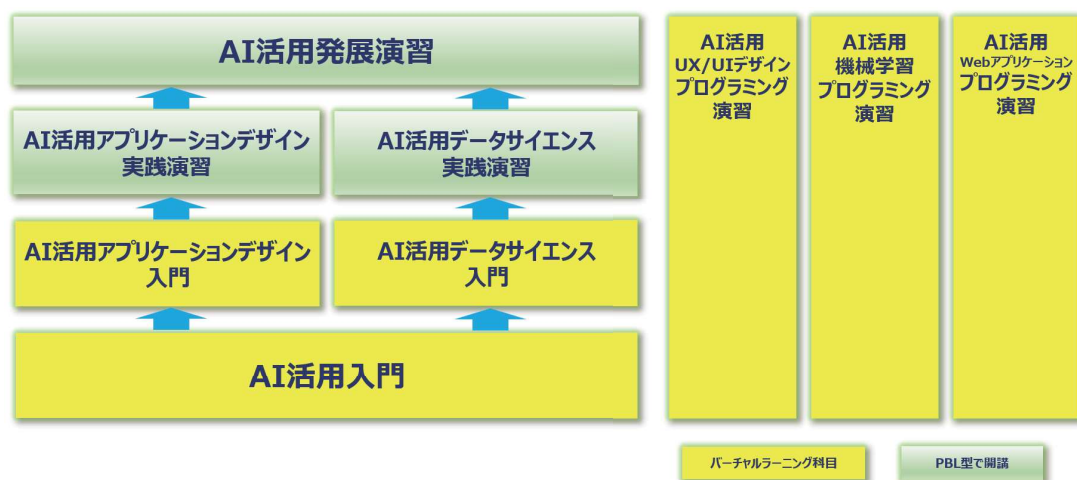


図 3: カリキュラム構成

AI活用入門では、産業構造の変化をはじめとする社会的背景に関する知識、生成AIなど最先端技術も含むAI技術の基礎、AI活用に必要なデータサイエンスの基礎、さらに、生成AIの活用も含むAIアプリケーション開発の基本を学習します。本科目では、リテラシーレベルのAI知識やスキルに加え、多様な事例の理解や基礎的なAIアプリケーション開発、データ解析の体験を通じて、AIを活用するための基礎的な感覚を養います。

AI活用アプリケーションデザイン入門では、AIおよび関連技術に関する知識とその活用能力、さらに生成AI活用も含むAIアプリケーション開発スキルの習得を目的としています。自然言語解析、音声認識、画像・動画解析AIといった技術や、クラウド上のAI機能を活用する技術、多様な事例とそれを実現する技術およびその組み合わせ方を学ぶことで、AIを活用する能力を高めるとともに、AIアプリケーションの開発にも取り組みます。

AI活用データサイエンス入門では、AI活用に必要なデータ解析の知識とその活用スキルに加え、問題解決フレームワークやマーケティングフレームワーク、さらに分析結果を適切に顧客へ伝えるための方法を習得します。一般的なデータサイエンス教育では数学的知識の習得に重点が置かれるのに対し、本科目では多数の事例を通して実践的な活用方

法に重点を置いています。また、実務においてコンサルタントがデータ分析から提案作成に至るプロセスも学ぶことで、ビジネス現場で活用できるスキルを身につけます。

AI活用機械学習プログラミング演習では、AIの中核技術である機械学習および深層学習の知識と、Pythonを用いた開発スキルの習得を目指します。そのため、機械学習や深層学習の仕組みを理解するとともに、プログラミング言語Pythonの基礎を学び、これらの技術を用いたプログラミングに取り組みます。

AI活用Webアプリケーションプログラミング演習では、AIを活用したWebアプリケーション開発に必要な知識と、Javaによる開発スキルを習得することを目的としています。そのために、Webアプリケーションの動作原理、開発に必要なJavaの基礎、オブジェクト指向に基づく開発プロセスやソフトウェアテスト方法を学び、さらに顧客の要件に応じたWebアプリケーションの開発演習を行います。

AI活用UX/UIデザインプログラミング演習では、AIを活用したWebアプリケーションにおけるユーザーインターフェイス（UI）およびユーザーエクスペリエンス（UX）の設計に関する知識と開発スキルの習得を目的としています。そのために、UX/UIデザインの基本的な考え方やデザイン思考、HTML、CSS、JavaScriptの基礎を学び、テーマに応じたシステム開発を行います。

プログラミング演習科目では、ブラウザ上で完結するオンラインプログラミング環境も導入しています。AI活用人材育成プログラムにおけるオンラインプログラミングの目標は、「プログラミングの基礎の理解」、「プログラム読解力の習得」、「基本的なプログラムを開発できる能力の獲得」、「AI関連技術における多様なアルゴリズムの理解」、「既存プログラムを活用した開発能力の習得」です。一方で、「アルゴリズムを一から設計すること」や「高度なプログラムを自力で開発すること」までは対象とせず、目的とするスキルに最短で到達できるよう教材とオンライン環境を設計しています。

学内で実施されるAI活用アプリケーションデザイン実践演習、AI活用データサイエンス実践演習、AI活用発展演習では、バーチャルラーニング科目で習得した知識を応用し、ビジネス現場に近い題材を扱った多様な実践演習や、企業・団体が抱える実課題に対する解決策を提案するPBLを対面形式で行います。対面型の利点を活かし、社会環境の変化に応じた柔軟な教育を実現するとともに、その時々で最適なツールを選択・活用できるようにしています。ツールの操作方法は動画で自主学習できるよう整備し、授業時間中は課題解決に集中できる環境を整えています。

AI活用アプリケーションデザイン実践演習では、顧客ニーズを分析し、それに適したAIアプリケーションを開発する能力を養う演習を行います。AI活用データサイエンス実践演習では、与えられたテーマに基づき、課題設定、仮説構築、データ分析、ストーリー設計、資料作成、プレゼンテーションに至る一連の流れを通じて、解決策を提案する実践的な演習を行います。

AI活用発展演習では、企業や自治体などが抱える多様な課題に対し、チームで取り組み、AIを活用した解決策を提案する能力の習得を目的としています。そのために、デザイン思考に基づいて、ビッグデータ分析やヒアリングを通じて顧客ニーズを把握し、課題の特定と分析を行い、AIアプリケーションの開発から高付加価値なソリューションの設計・提案までを行う総合的なPBLに取り組みます。こうした学習を通じて、ビジネスの現場で即戦力となる実践的スキルを身につけます。

2.6 受講状況

AI 活用人材育成プログラムでは、2019 年度から 2025 年度までの学内受講生数は累計 3 万人を超えています。必修科目ではないにもかかわらず、最初に受講する AI 活用入門はほぼすべての学生が受講しており、毎年 5,000 人を超える AI 活用リテラシーを有する人材を輩出しています。これは、理工系学部の学生だけでなく、文系・理系を問わず全学部の学生が受講していることを意味しており、学生たちは自分にとって本当に必要だと考えれば能動的に学ぶということ、また実際にその姿勢を引き起こしていることを示唆しています。将来をしっかりと見据えている学生たちは、我々の期待以上に「AI×何か」の可能性を感じており、そのために自らを鍛えなければならないと意欲的なのだと思われます。本プログラムは、このような学生たちの潜在的なニーズを捉えたものになっていると言えるでしょう。

なお、全員を対象とするアンケート調査では例年 90%前後が「満足」と回答しています。受講生の声として、「興味があるけど文系には難しいのではないかという先入観や不安はあったが、一般教養として知っておくべき内容や実践的な講義を通じて学ぶことができ、比較的楽しみながら進めることができた」、「図や例などを用いていて頭に入ってきたし、ワークで習ったことを実践できるから理解も深まり、わからないところがあっても前の講義に戻って確認することができた」というものがあります。

学外（法人・社会人・自治体・他大学等）への提供に関して、のべ受講生数は 2025 年度時点で 7000 人を超え、契約法人数ものべ 200 社を超えています。つまり、多様な業界の企業や他大学において、費用対効果の観点も含め、各組織での厳格な評価を経て導入されており、既に大きな波及効果をもたらしていると言えるでしょう。

3 数学活用人材の育成に向けて

生成 AI の登場は、人間の知的活動そのものをどのように再定義するかという問いを私たちに突きつけています。その影響は教育にも及び、学び方や教え方、さらには評価のあり方にまで大きな変化をもたらしています。

例えば、生成 AI に依存して自ら考えようとしないう、あるいは生成 AI の回答を無批判に受け入れてしまうといった状況が懸念されています。また、従来型のレポートや課題は生成 AI による代替が容易になったため、成果物だけを対象とした評価の信頼性も揺らぎつつあります。生成 AI を教育の中でどのように活用すべきかについては、いまだ決定的な方法論は確立されておらず、各教育現場で試行錯誤が続いています。しかし、大まかな方向性は徐々に見え始めているように思います。

生成 AI への過度な依存や無批判な受容の背景には、従来の教育が「正解を見つける力」を重視してきたことがあるのではないのでしょうか。この考え方には、「正解があらかじめ存在する」という暗黙の前提があります。しかし、正解とは自明に存在するものではなく、その正しさは自ら示さなければなりません。これは数学を専門とする者にとっては当然の認識ですが、社会一般との間には大きな隔たりがあります。

もちろん、この考え方は数学に限ったものではありません。どの分野においても、測定結果や観察事実、複数の一次資料に基づいて論理的な推論を積み重ね、「正しさ」の蓋然

性を示していくことが重要です。しかし、入試をはじめとする教育の中で「正解を見つける力」が過度に重視されてきた結果、証明や論理的検討の過程よりも、効率よく答えを得ることが優先される傾向が生まれました。その延長線上に、「もっともらしい答え」を即座に提示してくれる生成 AI への安易な依存があると考えられます。この問題への対応として、数学教育において証明を重視することも一つの考え方です。しかし、証明問題を苦手とする者はたいへん多いため、強制すれば嫌悪感を持たれる恐れもあり、現実的ではありません。

むしろ有効なのは、「AI と協働しながら新しい価値を生み出す力」を育成することではないでしょうか。この考え方は現在、生成 AI 時代に求められる力として幅広く支持されています。このような力を育成するためには、AI の仕組みや限界に関する基礎的な理解に加え、AI を適切に活用するためのスキルが必要です。特に、生成 AI から有益な回答を引き出すためには、自分の考えを的確に言語化する能力と、得られた情報を吟味する健全な懐疑心が欠かせません。自らの思考を言葉にし、提示された情報の真偽を検討することは、いわば「証明する力」を身につけるための一歩目にあたります。まずはそこに目を向けてもらうことが、現実的かつ有効な解決策の一つであるように思います。

必ずしも数学そのものに強い興味を持たない人々であっても、AI やデータサイエンスに関して、まずは活用できるようになりたいと考える人は数多く存在します。活用したいという意欲を持つ人々は、すでに一定の関心を持っています。そうした人々に過度な心理的負担を与えず、学びの入口に誘うことができれば、数学や AI に関わる人材の裾野を広げられる可能性があります。

関西学院大学の AI 活用人材育成プログラムの設計にあたって、「まずは使えるようになること」を重視しました。「学んだ内容の中から似た事例を探して活用できればよい」と考え、「どのような場面で何を使うか」を重視し、一方で「なぜそれが機能するのか」については必ずしも深い理解を求めない方針を採っています。そのため、方法の習得や豊富な事例紹介、実践的なサンプルコードの提示を重視し、数学的訓練そのものは思い切って省きました。

もちろん、証明をしないどころか、数学的背景を十分理解しないまま結果だけ利用することに対して、個人的には強い抵抗感があります。また、適用範囲を誤解したまま利用することで誤った結論に至る危険性も理解しています。しかし、厳密な理解を求めるあまり逃げてしまう人を増やしてしまうより、「まずは使ってみる」ことで学びへの入口に立とうとする人を増やす方が重要ではないかと考えています。

AI やデータサイエンスを支える数学は非常に広範であり、そのすべてを厳密に理解してからでなければ取り組めないと思わせてしまうと、人材の裾野は広がりません。むしろ挫折や苦手意識を生み出してしまう恐れがあります。だからこそ、AI 活用人材育成プログラムでは、「AI と協働しながら新しい価値を生み出す力」の習得を目指して、多くの人にまず動き出そうとしてもらう仕掛けにしたのです。

数学教育は数学者を育てることだけが目的ではありません。数学との多様な関わり方を認め、数学を活用する人々、いわば「数学活用人材」を増やしていくことは、結果として数学に親しむ人の増加にもつながるでしょう。

生成 AI は長年にわたり本質的には大きく変わらなかった教育の「方法」を見直す契機をもたらしています。現代の教育学にも多大な影響を与えたチェコの思想家ヨハネス・コ

メニウス（1592年–1670年）は、世界で初めてイラスト入りの百科事典『世界図絵』を著しました。これはグーテンベルクによって発明された「印刷というメディア技術」を応用して作られた「視覚的な教科書」です。コメニウスは技術を活用して新たな学習方法を創出したのです。

コメニウスは『大教授学』の中で次のように述べています。「学ぶ者にとっては... 学習への嫌気がより少なくなり... 喜びと着実な成果とがより多くなる方法を探索し発見しなければならない」。現在の私たちは、生成 AI という新たな技術を活用し、新たな『世界図絵』や教育方法を創り出す時代に生きているのです。

参考文献

- [1] 関西学院大学 AI 活用人材育成プログラム（学内向け開講プログラム）
https://www.kwansei.ac.jp/academics/wide_programs/ai.html
- [2] 関西学院大学 AI 活用人材育成プログラム（学外向け開講プログラム）
<https://www.kwansei.ac.jp/kg-vlearning/>